

卒業生諸君、この度は長崎国際大学、そして大学院ご卒業おめでとうございます。もはや4年目に突入したコロナ禍の中ですが、本年5月、感染症分類Ⅱ類からⅤ類に変更されたとはいうものの、未だに感染は継続しており、諸君の学習、アルバイト、部活動など、計り知れない自由の制約があり、さぞ息苦しい中で時間が流れたのであらうとご推察申し上げます。ヒトは不遇な時こそ、どうわが身を処するかで価値が決まるといわれていますが、諸君はこのコロナ禍の中で、よくぞ様々な制約に耐え、卒業に漕ぎつけました。その努力と忍耐力に対し、心からその労をねぎらうとともにゴールに到達した諸君に Congratulations! と声を大にして賞賛いたします。

昭和から平成にかけて活躍した名落語家、立川談志は「思い出と言う名の未練」という味のある言葉を残して旅立ちました。思い出には絶えず未練が付きまとい、その思い出が貴重であればあるほど未練は残ります。楽しかった旅であればあるほど、あと一日、あと一時間あればと思うものです。この3年余り、様々な制約の中で学生生活を送った諸君は、この不条理な状況の中で、様々な未練、何とも知れないやるせなさ、怒りを残しながらの卒業なのかもしれませんが、一方でこの状況の中で、試練に耐え、様々な努力と工夫によって手にした確かな果実もあるものと思います。それは平時に手にしたものより、中身の濃い立派なものであると確信いたしております。

セルバンテスの小説をもとにしたミュージカル「ラマンチャの男」で唄われる「見果てぬ夢」は、ドン・キホーテが、風車を巨人と思い込み果敢に戦う滑稽な姿を描き歌ったものですが、post corona に向けて徐々に自由度を取り戻しつつある日常生活の中で、絶えず夢を持ち、たとえそれが「見果てぬ夢」に終わったとしても、自分らしく夢を持ち続けその夢に向かって挑戦して行ってほしいと希っております。

新人生時代という新たな地層時代に突入した人類は、もはや SDGs に取り上げられている17項目の課題を克服しなければ、未来はやってこないことが浮き彫りにされてきています。地球環境の悪化や異常気象に代表される待ったなしの問題に直面し生きていかなければならない諸君に人類の未来は委ねられているといっても決して過言ではありません。諸君は本学で習得したものをベースに、単なる見てくれや印象にとらわれない本物の人間力を備えた社会人に更にバージョンアップしていかねばなりません。そして、自分のために何をするかだけでなく、隣人のために、そして人類の将来のためにどう貢献していくかを考えながら、一度しか与えられない命を、そして健康を大事にし、充実した人生を送られんことを心から希っております。

令和5年9月2日

長崎国際大学 学長 安東 由喜雄